



YKSS

マネジメント
ニユース

編集 発行人

横田税務会計事務所

〒143-0022
大田区東馬込1-12-12
TEL 3775-1048 FAX 3775-1156
URL <http://www.kaikei.info>
中国進出企業コンサル部門
株葵ビジネスコンサルタンツ

◆ 12月の税務と労務

12月

(師走) December

23日・天皇誕生日

国 税 / 給与所得者の年末調整

今年最後の給与を支払う時

国 税 / 給与所得者の扶養控除等(異動)申告書

及び保険料控除申告書の提出

今年最後の給与を支払う前日

国 税 / 11月分源泉所得税の納付 12月10日

国 税 / 10月決算法人の確定申告

(法人税・消費税等) 1月4日

国 税 / 4月決算法人の中間申告 1月4日

国 税 / 1月、4月、7月決算法人の消費税の中間申告

(年3回の場合) 1月4日

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

地方税 / 固定資産税・都市計画税(第3期分)の納付

市町村の条例で定める日

労 務 / 健康保険・厚生年金保険被保険者賞与支

払届

支払後5日以内

ワン
ポイント

滞納額の半分は消費税 国税庁の発表によると、平成20年度の新規発生滞納額は8,988億円で、このうち、消費税の滞納が最も多く、全体の半分近い4,118億円を占めています。20年秋からの経済不況は21年度の滞納額に影響するため、赤字であっても納税が必要となる消費税の滞納額が、21年度は大幅に増えることが予想されます。

中国の自動車販売が絶好調

世界同時不況の出口が、アジアであることがはっきりしてきました。とりわけ中国経済の好調は、世界に勇気を与えています。中国政府の大規模な景気刺激策の効果によるものだとされますが、自動車産業もこれの恩恵にあずかっているようです。

減税対象となる小型車の販売が大きく伸びて、今年、中国はついに世界一の自動車市場となります。しかし、メーカー各社は利益率が小さい小型車では、利益をあげることができません。台数は伸びても、増益にはつながらないという厳しい状況に置かれています。

世界最大の自動車市場に

中国の自動車メーカーに幸運の時がやってきたかのようです。今年の1月以降、中国本土での自動車販売は前年に比べ23%増加し、通年では26%に到達しそうな勢いです。中国政府による自動車産業支援策が功を奏したわけですが、2009年の中国における自動車販売台数は1,180万台に達する見通しとなっています。これにより、中国は世界最大の自動車市場になる見通しです。

しかし問題がないわけで

はありません。販売台数は伸びても、利益が上がらないのです。

中国政府の減税と補助金

中国政府の自動車関連の景気刺激策は、小型車購入の際の減税と、ミニ・トラックに対する補助金です。7月までに販売された自動車のうち、政府の支援対象となった車は49%を占めています。消費者は、減税が受けられる車を選択します。

しかし、これら支援対象となった車はいずれもメーカーにとって利幅が小さいもので、1台あたりにすれば100ドルしか儲からないのが現状のようです。利益が大きい、より大型の車の販売はそれほど変わっていません。グローバル企業のジョイントベンチャーにとっては、とりわけ厳しい状況となっています。中国国産メーカーが、政府の補助金狙いから小型車に重点を置いているのに対し、海外組は利益狙いから、より大型、高額車に力を入れる傾向があります。

たとえば、BYD Autoは、ハッチバックが人気で、販売は183%伸びて20.8万台となりました。一方、中国でこれまで大きな成果をあげ

てきたトヨタですが、SUVを2車種新投入したにもかかわらず、今年はわずか5%しか伸びていません。前年比18.5%増、57万台を売った昨年とはうって変わった状況になっています。トヨタは中国事業の業績内容を公表していませんが、収益はかなり落ち込んでいるようです。

利益では厳しい状況

中国市場で、海外自動車メーカーの売上げは伸びていますが、利益では厳しい状況に置かれています。ゼネラルモータースの今年の販売は前年に比べて43%伸びていますが、中国市場での販売台数の5分の3は小型商用バンです。この車は1,300ドルという低価格であり、台数は出ても利益は少ないものとなっています。GMのアジア事業は、第1四半期は赤字となっています。

売上げが伸びれば、利益率の低下の穴埋めになるのは事実ですが、アメリカの経済危機に襲われる前のトヨタは、世界市場で得ていた利益の約半分を中国で稼いでいたことが信じられないくらいです。

POSでの発注ではない

セブン-イレブン・ジャパンを率いる鈴木敏文氏は、「重要なのは、人間による「仮説・検証」です。明日の売れ筋は何なのか、次の新たな売れ筋商品はどれなのか、店舗ごとに現場で仮説を立て、それをもとに仕入れをする。POS（販売時点情報管理システム）が出した売り上げランキングの結果をもとに発注するのではないのです。」と語ります。

各商品が売れた背景には何があるのか、各消費者は何を考え、どのような行動を取った結果、販売に結びついたのかということまで遡って主観的に考えること。つまり数字の背景にある「文脈」をひもとくことを日々繰り返すことで、顧客をより正確に解釈しようとし、「ユニークな視点」を手に入れることができるというのです。

三つのフレームワーク

この考え方は「コンテキスト思考」と呼ばれますが、これには、三つのフレームワーク（枠組み）があります。

一つ目は、「周りにある関係性」です。

例えば、現在、イトーヨーカドーのような総合スーパーの中にユニクロの店舗などが入っていることが多くなっています。ヨーカドーにとっては、ユニクロ店舗を上層階に置くことによ

って、ユニクロの衣料を求める顧客を誘引し、顧客が上層階から下層階に回遊する際に各フロアで買い物することを狙っています。

ユニクロは食料品などの購入を目的として来店する

「コンテキスト思考」

経営の限界をブレイクスルーして
企業や人を新しいステージに導くための

顧客の集客力をイトーヨーカドーに期待しています。このように、相互に刺激し合っていることに注意して下さい。

二つ目は、「価値観」です。

私たちの中には、それぞれに固有、曖昧模煇とした評価軸が存在しています。

例えば、ホンダの創業者である本田宗一郎氏は、技術屋である自分が、デザインなどの未知の領域で新しい製品を考えなくてはならなかった場面を「自分をいつわらずに、もう一度見つめ直して自分の納得できる造形をつくらう」と振り返っていました。この「ぶれない自分軸」によって、周りからどんなに貶されても自分の納得できる車の供給を貫徹し、現在のグローバル市場でのポジションを取ることになったと思われ

ます。三つ目は、「目的」です。企業や人の進む先にも、物理的には認識できない曖昧模煇とした「目的」という「文脈」が存在しており、私たちはその「目的」に向かって日々の行動を調和させて前に進んでいるのです。

「目的」という「文脈」を能動的に洞察して理解し、それを周りと共有することで「共感」を呼び起こすことができれば、周りはリーダーと同じ視点で、同じ方向に向かって能動的に動き出すようになります。リーダーは、数字の背景にある「文脈」をひもとくことを日々繰り返すことで、顧客をより正確に解釈しようと努めなければなりません。

「ワーク・ライフ・バランス」ってなに？

「ワーク・ライフ・バランス」という言葉を耳にするようになりました。ワークは仕事、ライフは生活を意味し、仕事と生活それぞれを大切にしながら、両者のバランスをとって両立していこうとの考え方です。

働き手のライフスタイルが「仕事専念型」であった時代には、ワーク・ライフ・バランスの実現を求める声はありませんでした。働く人が仕事上の責任を果たそうとすると、仕事以外の私生活において、やりたいことや、やらなければならないことに取り組みなくなるのが今までの普通の状況でした。

しかし、働く女性や共働きの世帯の増加など、働き手や夫婦のあり方が変化し、仕事以外にも「やりたいこと、やらなければならないことがある」人々が増えてきました。

こうした結果、企業として、従業員が能力を十分に発揮できる環境を整備するため

には、「仕事専念型」の従業員を前提とした働き方を見直し、仕事と生活を両立できる働き方を整えていくことが必要となりました。

仕事と生活の軸足の置き方は、働き手によって、また、ライフステージによっても違います。このため、個々人にとっては望ましいワーク・ライフ・バランスのあり方は多様です。また、「ライフ」の内容も家庭生活だけでなく、地域活動、学習、健康などさまざまなものがあります。

共働きの増加や、若い世代の意識の変化を背景に、仕事も家庭も大切にしたいという男性の声は確実に増えています。また、男性が育児参加できる社会を実現することの必要性も言われています。

ワーク・ライフ・バランスは、優秀な従業員の確保定着や、従業員の意欲の向上の他、生活と両立しやすい働き方により、女性や高齢者を含め、多様な価値観や生活経験を持つ人材の能力が活用され、企業経営にメリットをもたらすとされています。

ゴボウの話し

ユーラシア大陸北部が原産だと言われるゴボウは、はるか昔、平安時代に「薬草」として中国から渡ってきました。しかし平安中期の書物に献立としてゴボウの記述が見られることから、日本人は最初から「野菜」として食べていたようです。

現代の世界を見渡しても野菜として食べているのは日本人だけのように、日本向けにゴボウを生産している台湾や中国で、最近になって食用にされている程度。欧米人は「日本人は木の根っこを食べている！」と大変驚くという話もあるほど。

意外にも栄養的にはすぐれており、食物繊維が豊富。高脂血症や糖尿病の予防にも効果が期待できるとのこと。おもしろいのは、日本の東と西で異なるゴボウの長さ。短いゴボウを見慣れている関西の人は関東の長いゴボウを見て驚くそうです。

気になる静電気

冬になると気になるのが静電気。ものに触れたときや、衣類の脱ぎ着のときなどにパチパチッと痛さとともに不快感をもたらします。

世界で初めて静電気を発見したのはタレス。はるか昔の古代ギリシャ時代の人です。琥珀を磨くとホコリがくっつくことに注目し、磨いてはさまざまなものをくっつけていたとのこと。そのためElectricity（電気）の語源はギリシャ語の琥珀なのだそうです。

さまざまな静電気除去グッズも売られていますが、静電気は、私たちにいやな思いをさせるだけの「悪者」なのでしょうか。いえいえ、実は私たちの周りには静電気を利用している製品がたくさんあります。身近なところでは食品をつつむ包装ラップがお皿にくっつくのは静電気を利用しているからですし、ATMや駅の券売機などのタッチパネルにも静電気が使われたりしています。